

大学生男女の Binge Eating に関する心理的要因の検討

A study on psychological factors related to Binge Eating in male and female college students

植田 珠代 (Tamayo Ueda) 指導：野村 忍

【問題と目的】

Binge Eating (むちゃ食い；以下BE) は、ほとんどの人が食べるよりも明らかに多量の摂食と、むちゃ食いエピソード中の制御困難な感覚によって特徴づけられる症状であり (Fairburn, 1995), 心理学的, 社会的, 生物学的領域などからその危険性が指摘されている (Jacobi et al, 2004他)。Hudson et al. (2007) はBEは男女とも高頻度で見られること, 青年期にBEのリスクが高まることを明らかにしており, 青年期の男女を対象とした研究の蓄積が期待されている。しかし, 先行研究において女性で指摘されている要因 (Stice, 2000; 幸田・菅原, 2009 他) を統合的に検討した研究は本邦ではなく, また要因の性差に関しても十分明らかにされていない。

そこで研究1では, 青年期の男女を対象にBEに影響する心理的要因について性差をふまえて検討する。研究2では, BEエピソードの詳細な質的検討により, 研究1の結果との比較検討及び性差を検討することを目的とする。

《研究1》大学生男女におけるBE要因の検討

対象者：3 大学506名 (男性256名, 女性250名, 平均年齢=20.62歳, $SD=2.34$, 有効回答率=94.76%)

調査材料：

①フェイス項目 (年齢, 性別, 身長, 体重) ②理想の体重, 体型の認知とその理由 (厚生労働省 平成20年国民健康・栄養調査) ③Contour Drawing Rating Scale (Tompson & Gray, 1995) ④日本語版PANAS (佐藤・安田, 2001) ⑤ダイエット行動尺度 (松本・熊野・坂野, 1997) ⑥ストレスサー尺度 (尾関・原口・津田, 1994) ⑦Binge Eating 尺度 (松本・熊野・坂野, 1997)

【結果と考察】

まず, 本研究におけるBEの女性モデル (Figure 1.) を作成し, 多母集団同時分析による性差の検討を行った。その結果, 身体不満足感から非構造的ダイエットへのパス係数が男性では有意な値が得られず, BEの要因に性差が見られることが確認された。男性に関しては, Figure 2. のモデルが得られた。

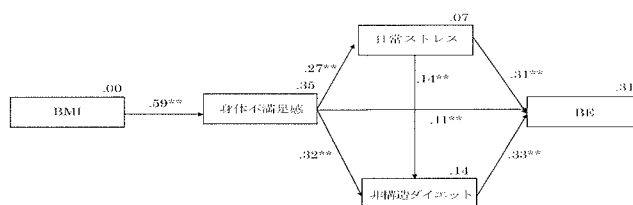


Figure 1. 女性におけるBEの要因モデル (N=250)

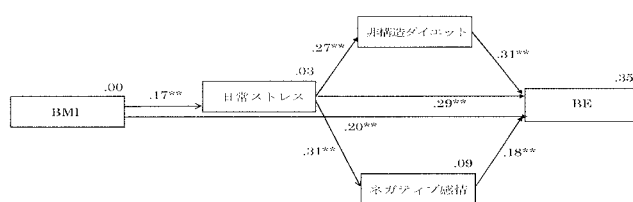
** $p<0.1$ GFI=.996, AGFI=.981, CFI=1.000, RMSEA=.000

Figure 2. 男性におけるBEの要因モデル (N=256)

** $p<0.1$ GFI=.992, AGFI=.961, CFI=.985, RMSEA=.053

《研究2》大学生男女におけるBEエピソードの特徴に関する検討

参加者：Binge Eating得点が平均+1/2SD以上の男性3名, 女性8名

手続き：半構造化面接によるインタビュー調査を行った。

【結果と考察】

BEの要因に関して, 女性では出来事から生じる特定の気分状態にうまく対処できない感情不耐性, 食事制限 (ダイエット) が, 男性に関しては食事制限 (ダイエット) は確認されず, 感情不耐性が影響している可能性が伺えた。その他, BE嗜好食品には性差が見られた他, BEは夜間に生じしやすいことが明らかになった。また, BEはその後の心理面, 身体面に悪影響を及ぼし, QOLを低下させることが明らかになり, 今後のBE予防のためにも研究の必要性が示唆された。

【総合考察】

研究1及び研究2において, BEの要因に関して性差が見られる可能性が示唆された。研究1においては手続きの再検討が, 研究2においては参加者を増やした検討を行う必要があるほか, 今後は長期的, 縦断的な検討が期待される。